

【 復活讃詞 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきよりくだり、みっかの
 恵 深 主 爾 高 降 三日

ほうむりをうけて、われらをくるしみよりときたまえり、
 葬 受 我 等 苦 釋 給 えり、

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こうえいはなんぢにきす。
 我 生 命 復 活 主 光 榮 爾 んぢに 帰 す。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまもいつもよよ世
 光 榮 父 子 聖 神 歸 す、今 何 時 世 世

に、アミン。

しととひとしくどうざなるものちゅうじつにしてしんちなる
 使 徒 等 同 座 なる 者 忠 實 に して 神 智

ハリストスのえきしゃ、せいなるしんにえらばれたるふえ、ハリストスの
 役 者 聖 なる 神 撰 ら ば れ た る 笛、ハリストスの

あいにみちたるうつわ、わがくにのこうしょうしゃ、
 愛 満 る 器 我 國 光 照 者

あしとしゅきょうせいニコライよ、なんぢのぼくぐんのため、
 亜 使 徒 主 教 聖 爾 羊 群 爲

およびぜんせかいのため、いのちをたもうせいさんやにいのり
 及 全 世 界 爲 め に、生 命 賜 聖 三 者 祈



たまえ。

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と

なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、

願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に痛悔

を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な

る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者と

なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を

以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と

を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる

生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世

に、



アミン。

【 聖三祝文 】



せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなるじょうせいのものよ、



われらをあわれめよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、



せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。せいなる

か み 、 せ い な る ゆ う き ぎ 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 神 聖 勇 毅 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
 憐 光 榮 父 子 聖 神 歸 す 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 何 時 世 世 に 、 ア ミ ン 。 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き ぎ 、 せ い な る
 憐 聖 神 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め よ 。
 常 生 者 我 等 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、)

【 提綱 (プロキメン) 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

しゅ なんぢらのかみにちかいをなしてつくのえよ、
 主 爾 等 神 誓 作 償

誦經) 神はイウデヤに知られ、其名はイズライリに大なり、

しゅ なんぢらのかみにちかいをなしてつくのえよ、
 主 爾 等 神 誓 作 償

誦經) ^{しゅなんぢら} 主 ^{かみ} 爾 等の神に



ち かい を な し て つ く の え よ 、
誓 作 償

【 使徒經 (アポストロス) コリント後書 6 章 16 節~7 章 1 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが ^{じん たつ} コリント人 に ^{こうしょ よみ} 達する 後書 の 讀、

司祭) ^{つつし} 謹 みて 聽く べし、

誦經) ^{けいてい} 兄 弟よ、 ^{なんぢら} 爾 等は ^{かみ} 活ける 神の 殿 なり、 ^{かみ} 神の ^{かつ} 嘗て ^い 言いが ^{ごと} 如し、 ^{いわ} 曰く、 ^{われ} 我 ^{かれら} 彼等 ^{うち} の 中 に ^お 居

り、 ^{かれら} 彼等 ^{うち} の 中 に ^ゆ 行かん、 ^{われ} 我 ^{かれら} 彼等 ^{かみ} の 神 となり、 ^{かれら} 彼等 ^{たみ} 我の 民 とならん。 ^{しゅ} 主 又 ^{いわ} 曰く、 ^{ゆえ} 故に ^{なんぢ} 爾

等は ^ら 彼等 ^{かれら} の 中 ^{うち} より ^い 出でて、 ^{みづか} 自 ^{はな} ら 離れよ、 ^{けがれ} 汚穢 に ^ふ 觸るる ^{なか} 勿れ、 ^{しか} 然らば ^{われ} 我 ^{なんぢら} 爾 等を ^い 納れん、 ^{われ} 我

爾 等 ^{なんぢら} の 父 となり、 ^{ちち} 爾 等 ^{なんぢら} 我 ^{しちよ} の 子 女 とならん、 ^{しゅ} 主 ^{ぜん} 全 能 者 ^の 之 ^{うし} を ^{うし} 言ふ。 ^{これ} 是 ^い の 故 に ^こ 至 ^{ゆえ} 愛 ^し の 者 ^{あい} よ、

我 ^{われ} 等 ^{らす} 既に ^か 此 ^{ごと} く の ^き 如 ^き 許 ^{やく} 約 ^え を ^お 得 ^の た ^れ ば、 ^お 己 ^お を ^そ 凡 ^{にく} の 肉 ^{しん} と 神 ^{けがれ} と の 汚 ^い より ^い 潔 ^{ぎよ} く ^{かみ} し、 ^{かみ} 神 ^を を

^お 畏 ^そ る ^も を ^つ 以 ^{せい} て ^な 聖 ^を を 成 ^す べし。

(比較用 口語訳)

兄弟たちよ。わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう」。だから、「彼らの間から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触てはならない。触なければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる」。

愛する者たちよ。わたしたちは、このような約束を与えられているのだから、肉と霊とのいっさいの汚れから自分をきよめ、神をおそれて全く清くならうではないか。

【 アリルイヤ 】

司祭) ^{なんぢ} 爾 に ^{へいあん} 平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 の ^{しん} 神 にも。アリルイヤ。



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

誦經) 来た^{きた}りて主^{しゅ}に歌^{うた}い、神^{かみ}我^わが救^{すくい}の防^{かた}固^めに呼^よばん、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

誦經) 讃^{さん}揚^{やう}を以^{もつ}て其^{その}顔^{かん}面^げの^{まへ}前^{すす}に進^{うた}み、歌^{うた}を以^{もつ}て彼^{かれ}に呼^よばん、



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: 人^{ひと}を愛^{あい}する主^{しゅ}宰^{さい}よ、我^わが心^{こころ}に神^{かみ}を知^しる智^ち慧^えの^い浄^ぎき光^{ひかり}を輝^{かが}かし、我^わが思^し念^{ねん}

め 目^めを啓^{ひら}きて、爾^{なんぢ}が福^{ふく}音^{いん}の^お教^{しよ}を悟^{さと}らしめ給^{たま}え、我^わが衷^{うち}に爾^{なんぢ}の福^{ふく}たる^い誠^まを

おそ 畏^{おそ}る^れ 畏^いをも入^{われ}れて、我^{われ}等^らが 悉^{ことごと}くの肉^{にく}體^{たい}の^{よく}慾^ふを踏^{およ}み、凡^{なんぢ}そ爾^{よろこ}の喜^{ところ}ぶ所

を思^{おも}い且^かつ行^{おこな}いて、属^{ぞく}神^{しん}の生^{せい}活^{かつ}を過^すぐるを致^{いた}させ給^{たま}え、蓋^{けだし}ハリス^{かみ}トス神^{かみ}よ、

なんぢ 爾^わは我^{たま}が 靈^{たましい}と體^{からだ}との光^{こう}照^{しやう}なり、我^{われ}等^ら 爾^{なんぢ}と 爾^{なんぢ}の無^{むげん}原^{ちち}の父^しと至^し聖^{せい}至^し善^{ぜん}にし

いのち 命^{いのち}を施^{ほどこ}す 爾^{なんぢ}の神^{しん}とに光^{こう}榮^{えい}を獻^{けん}ず、今^{いま}も何^{いつ}時^よも世^よ世^よに、ア^あミ^ん。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書 15章 21~28 節 】

司祭) 睿^{えい}智^ち、肅^{つし}みて立^たて聖^{せい}福^{ふく}音^{いん}經^{けい}を聴^きくべし、衆^{しゅう}人^{じん}に平^{へい}安^{あん}、



なんぢ の し ん に も 。

司祭) マトフェイ傳^{でん}の聖^{せい}福^{ふく}音^{いん}經^{けい}の讀^{よみ}、



しゅよ、こ う え い は なんぢ に き し 、 こ う え い は なんぢ に き す 。

司祭) 謹^{つし}みて聴^きくべし、

司祭) 彼^かの時^{とき}イ^おス^よス、テ^ちィ^いル及^みびシ^おド^んの地^おに^な入^おれ^いり。視^みよ、ハ^おナ^んア^んの 婦^お 其^お 疆^ん 更^いより出^いでて、

かれ よ い しゅ こ われ あわれ わ むすめ まき よ はなはだ 彼^{かれ}に呼^よびて曰^いえり、主^{しゅ}、ダ^こウ^わィ^あド^わの子^こよ、我^わを 憐^あれ^いめ、我^わが 女^{むすめ} 魔^ま鬼^{まき}に憑^よらるること 甚^{はなはだ}し。

しか 然^{しか}れども彼^{かれ} 一^い言^{ごん}も之^{これ}に答^{こた}えざりき。其^{その} 門^{もん}徒^と就^つきて、彼^{かれ}に請^こいて曰^いえり、之^{これ}を去^きらしめよ、

けだしわれら あと よ かれこた い われ ただ いえ ほろ ひつじ つかわ
蓋 我等の後より呼ぶ。彼 答えて曰えり、我は惟 イズライリの家の亡びし 羊 にのみ 遣

されたり。 婦 近づきて、彼を拜して曰えり、主よ、我を助けよ。彼 答えて曰えり、兒曹

の餅を取りて、狗に投ぐるは、宜しからず。 婦 曰えり、主よ、然り、但 狗も亦 其 主の

食卓より遺つる屑を食う。其 時 イイス 答えて彼に謂えり、嗚呼 婦 よ、爾 の信は 大

なり、爾 が望む如く 爾 に成るべし、其 女 斯の時より愈えたり。

(比較用 口語訳)

さて、イエスはそこを出て、ツロとシドンとの地方へ行かれた。すると、そこへ、その地方出のカナンの女が出てきて、「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれて苦しんでいます」と言って叫びつづけた。しかし、イエスはひと言もお答えにならなかった。そこで弟子たちがみもとにきて願って言った、「この女を追い払ってください。叫びながらついてきていますから」。するとイエスは答えて言われた、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」。しかし、女は近寄りイエスを拜して言った、「主よ、わたしをお助けください」。イエスは答えて言われた、「子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」。すると女は言った、「主よ、お言葉どおりです。でも、小犬もその主人の食卓から落ちるパンくずは、いただきます」。そこでイエスは答えて言われた、「女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるように」。その時に、娘はいやされた。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいはなんぢにきす。
主 光 榮 爾 に 歸 し 光 榮 爾 に 歸 す。

※聖体礼儀③ へ